

浅野さんの今回の試みは、戦後精神科医療史をみていく確乎とした一軸を提供している。希望をいえば、論争の経過図のようなものをつけてほしかった。そうすれば、時代の流れのなかでの論争の位置づけがよくわかるからである。じつは、論争主題の下のカッコ内に入れたものは、浅野さんの叙述からわたしがぬきだしたものである。さらに注文をつければ、人名索引もほしい。時代の主役、脇役がパツとうかびあがるからである。

いずれにせよ、戦後精神科医療史をみていくための、そして今後の精神科医療の方向をみさだめていくための好著としてこれをおしたい。このところの生物学的精神医学の進歩は目ざましく、分裂病の病因・病態発生が解明されつくし、治療法もちかく確立されるだろうとの幻想さえいだかせる。だが、先進国中最高の精神科病床をもちつづける日本にとって大事なものは、精神疾患をもつ人をどう治療していくか、その人たちがいきる場をどうとのえていくか、そのおおきな社会的枠組みを構築していくことなのである。

(岡田 靖雄)

(批評社、文京区本郷一―二八―三六 鳳明ビルF、電話〇三―三八―三―一六三四四、平成十二年十月十日、B六判、二―一頁、本体価格二〇〇〇円)

岡田 靖雄 著

『精神病医 斎藤茂吉の生涯』

斎藤茂吉は、「学校および病院の先輩であった精神病医」であり、「茂吉つっあん」とも呼ばれるのも聞いて、「近所のお父さん」という親しさもいだいてきた」という著者でなければ書けない本である。

精神医療史研究者である著者が、呉秀三の業績を調べているときに、斎藤茂吉の日記を読んで衝撃をうけたことが、この本の発端になっている。

その後、二十数年のあいだあたためつづけてきたテーマが、ここに結実した。

歌人として名高い斎藤茂吉を、精神病医として、いまどう評価すべきか。

呉秀三の弟子としては、森田正馬、下田光造のような一流の精神医学者ではなく、三宅鉦一、植松七九郎のように精神衛生運動をひきついで活動に貢献することは少なく、斎藤玉男のように新しい精神病院をめざそうとしたのでもない。

また、義父斎藤紀一のように、病院経営に秀でていたのでもないのである。

しかし、その当時、精神病医として最良の教育をうけ、教授として留学し、また婿として、病院をひきつぎ、日本が最も苦しかった時代を、誠実な精神病医として過ごした生涯は、評価されるべきである。

歌人としてだけの一生を評価されるのは、茂吉の本意ではあるまい。

著者は、愛情をこめて、精神病医として生きた斎藤茂吉の生涯をつづっている。

それだけでなく、この本は「斎藤茂吉という人を切り口としての、精神科医療史の一断面となるだろう」と著者が序文でのとべている通り、茂吉が精神病医であった時代（一九一一年、明治四十四年から一九四五年、昭和二十年）の日本の精神科医療を、なまなましくつづっている。

この時代の日本の精神病医のあり様を、まとめて残しているものは、かれの日記、書簡、手紙、歌においては、いまやなくなっている。

著者は、原資料にもとづいて、彼の生涯にせまっていると同時に、彼と関連している精神病医を、たんねんに拾いあげて、略伝のように記載している。巻末の人名索引を活用することにより、この当時の精神科医療史を研究するものにとつて、必携のものとなるだろう。

「日本の現代精神科医療史をかくことをこころざしている」という著者にとつて、この本は絶対に必要な一里塚である。

著者による日本の現代精神科医療史の完成が、すみやかであることを願わずにはいられない。

（小峯 和茂）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五—七五一—一七八一、平成十二年十一月九日、A五判、三三

六頁、本体価格三〇〇円〕

山崎 光夫 著

『日本の名薬』

誰にでもひとつふたつは「飲みなれた薬」や「家族の誰かが飲んでいた薬」というものがある。特に日本には長く大衆薬の歴史があつて、医者にはかからないで「買ってきた薬」でなんとか治してしまう人も少なからずあり、その人の数だけ「名薬」があると言うこともできるだろう。

本書は一見古い薬袋のような装丁で、そのページをめくれば、百早丸、赤玉はら薬、喜谷実母散、宇津救命丸などよく知った名前の薬が登場する。最近では雑誌やテレビでも伝統的な薬が取り上げられる機会が多いが、本書は薬の効能については科学的な裏付けを示し、その一方で薬舖や薬にまつわる人物や地域の歴史を丁寧にもといている。また、単に昔を懐かしむのではなく、ワシントン条約以降の生薬の入手問題や後継者難、病める現代人と薬の関係など、「現在」という視点を常に持ちつつ、伝統的な薬をめぐる諸相を描写している。著者はあとがきでも書かれているように、かつては雑誌記者として専門医を訪ね、現在は医学関係の著作を発表されており、長年にわたって医薬の現在を見聞してきた積み重ねが本書に活かされているといえよう。

医薬史については本学会を初め、最近では若い研究者も増